

審査員特別賞

みんなが幸せを感じられる空間をつくる。

岡山県立岡山城東高等学校 3年

池内 瑛美

私は将来みんなが幸せを感じることでできる快適な空間を設計する建築士になりたいと思っている。

昨年、高校の研修でマレーシアへ行った。マレーシアの鉄道の駅では反対側のホームに行くにはわざわざ一旦改札から出なければならず、また非常に階段が多かった。

日本では様々な障害を持っている方でも利用しやすくするために、点字ブロック、スロープ以外にも車椅子対応のエスカレーター、多機能トイレなどの様々なバリアフリー設備が公共施設を中心に設置されている。このような設備は広がっており、今では公共施設以外の施設や道路でも見ることができる。日本では日常的にバリアフリー構造を目にするようになってきている。

しかし、発展途上国ではそうではなく、そもそもバリアフリーという概念そのものが国民に浸透していないのではと感じた。そこで、今まで日本のODAによって建設した医療施設での障害者に対する配慮が、東南アジアでは、どのように施されているのだろうかと思い、タイのアジア太平洋障害者センター、アフガニスタンの感染症病院、ラオスの新セタティラート病院について調べた。具体的には、外務省の『ODA 白書』を始めとした様々な書籍、更にはJICA 職員へのインタビューなどを通して、情報収集した。

タイ、アフガニスタンの施設は、建物自体が新しいという点もあり、バリアフリーが施されていた。タイの施設では段差をなくし、ボタンひとつの位置にもこだわるなど様々な障害者に合わせており、実際に利用していた人々も不自由を感じているという意見は全くなく、皆現在の設備に満足していた。また、アフガニスタンの施設では、手すりや引き戸、段差を極力避けた設備になっている。しかしラオスの施設は15年以上前に建設されており、障害者への配慮がなされていなかった。ラオスにおいて、バリアフリー化が進んでいない理由のひとつに、主に経済的理由により現在でも車椅子が普及していないことがある。特に農村部の肢体不自由者は、ほったらかしにされている傾向にある。この現状を改善するためには、バリアフリーの施設の建設を進めるとともに、車椅子を普及させる必要がある。

現在でも車椅子を普及させようと活動している人はいるが、私はODAで建設した建物を

バリアフリー化することにより国民にバリアフリーという概念を広めつつ、手始めに日本で使用しなくなり家で眠っている車椅子を集め、ラオスへ運び無料で貸し出ししていきたいと考えている。

そして、私は現在高校3年生で、建築学科のある大学への進学を目指し頑張っている。大学では建築学を学ぶとともに、国際問題や国際協力について積極的に情報を集め、実際に現地に赴きたいと考えている。大学在学中にラオスへ出向き、自分の目でその現状を見て今考えていることの実現に向けて努力するつもりだ。また、この考えよりもっと良い手立てはないかについても模索するつもりだ。そして、大学卒業後は建築士として発展途上国に出向き、現地の人たちが快適に過ごせ、幸せを感じられる空間を作りたいと思っている。

今まで発展途上国の課題に対して自分ができることが分からず、何も案がなかった。しかし、今回東南アジアのバリアフリーについての調査をしていく中で、私が幅広い視野と優れた技量を兼ね備えた建築士になれるよう勉学に励むことが、グローバルな課題に貢献することにつながるのだと痛感した。一人ひとりが今できることは小さいことだが、それを積み重ねることで大きなものとなる。私たちは今それぞれ自分たちが思うことを調べ、実行に移していくべきだ。今日、明日にでも実行できるだけの環境に恵まれていることを忘れてはならない。